

鍛冶魂 舞草刀に結実

一関 チェコなど3人修業終了



菅原平さん(右)の指導の下、3振りの刀を完成させた(左から)ヤン・ベネスさん、マーティン・オルナックさん、パベル・ボルフさん

の最盛期を迎えたとされる舞草刀の存在を知り、同国の通訳ヤン・ベネスさん(30)、スロバキアの研師、マーティン・オルナックさん(36)と菅原さんの作業場で10月26日から刀作りに励んできた。

今回の取り組みを企画した舞草刀研究会(中鉢弘会長)の会員が完成を祝う中、菅原さんは「作り手の特徴が刀に表れている」と3人の努力をたたえた。

ボルフさんは「日本の様式を細かい部分まで学べた。地元の砂鉄を使った刀作りがとても興味深く、また来たい」と充実。オルナックさんは「言葉で言い尽くせない経験で、本当に感謝している」と感激していた。

一関市大東町大原の刀匠、菅原平さん(94)の下で約1週間、技術を習得してきたチェコを復元した毛抜形太刀の刀鍛冶、パベル・ボルフさん(39)ら3人は最終日の1日、日本刀の源流とされる舞草刀の玉鋼で作った蔵手刀を完成させた。

鉄川から採取した砂鉄の完成させた。ボルフさんは、平安期に一関市周辺で生産